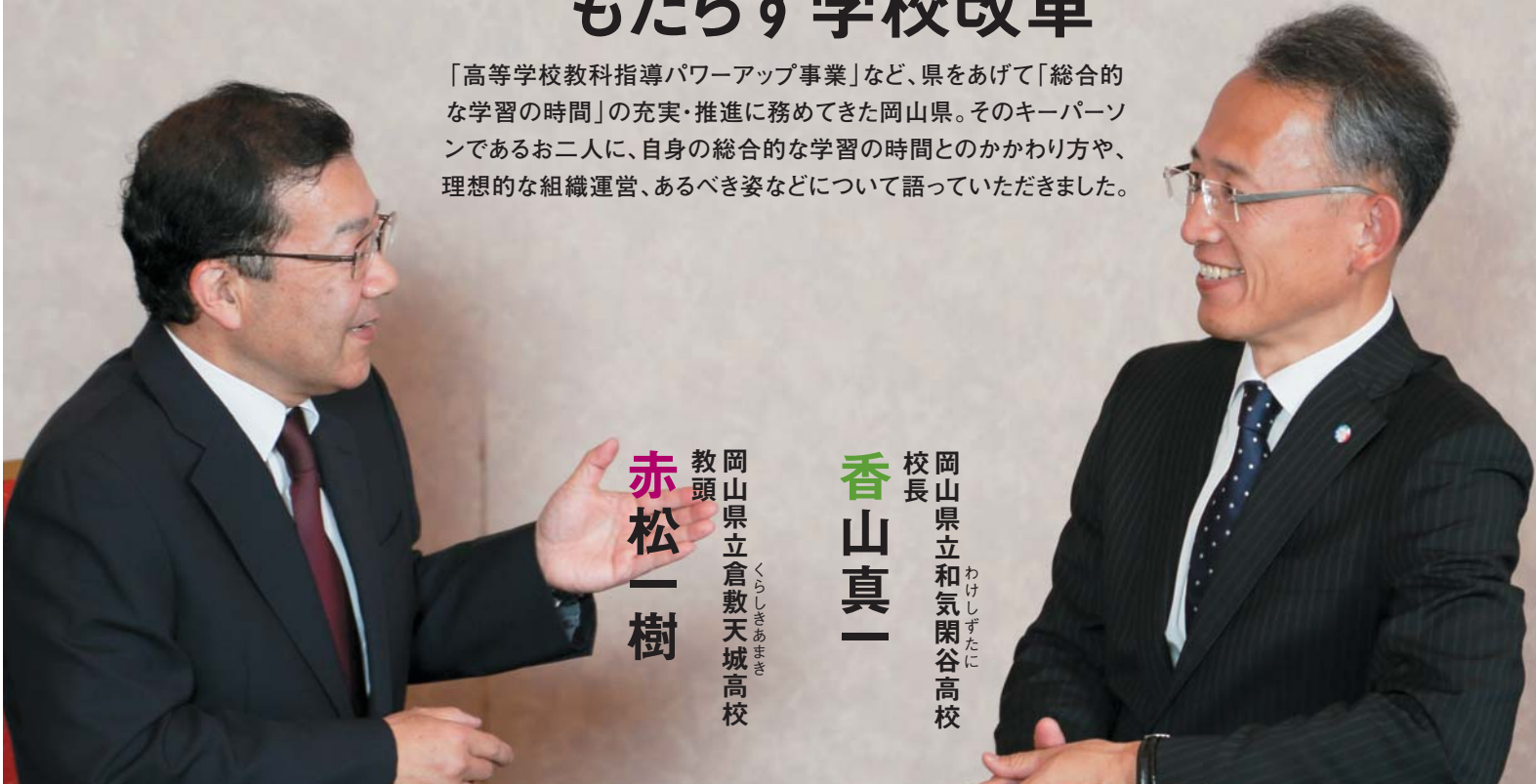


岡山県の現場から

「総合的な学習の時間」の転換が もたらす学校改革

「高等学校教科指導パワーアップ事業」など、県をあげて「総合的な学習の時間」の充実・推進に務めてきた岡山県。そのキーパーソンであるお二人に、自身の総合的な学習の時間とのかかわり方や、理想的な組織運営、あるべき姿などについて語っていただきました。



赤松 一樹
岡山県立倉敷天城高校
教頭

香山 真一
岡山県立和気閑谷高校
校長

あかまつ・かずき ● 1962年生まれ。岡山県立津山商業高校、玉野高校を経て、2000年岡山県教育庁 学校教育振興課。その後、倉敷市教育委員会、岡山県 総務学事課、岡山県教育庁 指導課(現高校教育課)を経て、2015年4月より現職。

こうやま・しんいち ● 1959年生まれ。岡山県立岡山大安寺高校、倉敷南高校、岡山工業高校、岡山操山高校を経て、2010年林野高校教頭。2013年より現職。文部科学省 高大接続システム改革会議委員。

取材・文／堀水潤一 撮影／杉原 歩

学校魅力化の柱となり、 時代の要請にも合致

——3つの県立高校で「総合的な学習の時間」(以下、総学)の充実を図ってきた香山先生と、県の教育行政に長く携わり今春、15年ぶりに教頭として現場に戻ってきた赤松先生。まず、お二人が総学にかかわり始めたころのお話をお聞かせください。

香山▼総学が高校で本格実施となった2003年、私は岡山操山高校の1

年の学年主任でした。前年に岡山操山中学校が開校し、併設型の中高一貫校になったのですが、進学先として岡山操山高校を選んでもくれる保証はありません。何としても高校の魅力化を図る必要があります。総学をその柱にしようと考えました。そこで課題

解決型の進路学習や課題研究を導入。今思えば、調査・研究の過程が弱く、調べ学習に毛が生えた程度でしたが、総学に対する意識は高かったと思います。

赤松▼当時、私は岡山県の教育委員会にいました。本県では02年から高校の再編整備が進んでいたのですが、新設校などでは、総学を目玉にしようという動きがあり、岡山操山中・高もその一つでした。

香山▼一般入試で勝負する生徒が多い進学校でしたが、AO・推薦入試が進学実績が伸びたのは、その見極めに関心を入れたことに加え、総学で課題解決型の学習をしたことが学びの内発的な動機づけになったからだと思っています。興味や関心をもって何らかの課題に取り組んでもすぐには解決しません。だから大学で学ぶのだという、偏差値ではない大学選びの尺度ができたと感じました。

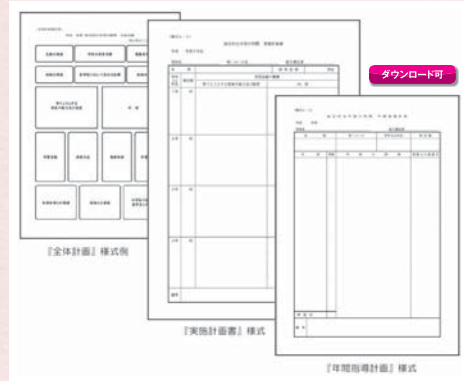
赤松▼後に香山先生が異動する林野高校も、このころから、生徒が地域に出て、興味分野別に体験活動する取り組みを始めていましたね。

香山▼林野高校は過疎化が進み、地域創生が課題となる地域にあります。10年に私が教頭として赴任してからは、体験だけではなく体験を通じて本質に気づかせることに力を入れました。例えば、郷土芸能の獅子舞を体験する生徒がいますが、これを「人口減に悩む集落の文化をどう持続可能にしていくのか」という地域課題に結びつけるよう促しました。総学の取り組みから社会学、地域学に関心をもつ生徒も生まれるなど、学びの「再デザイン」を行いました。

赤松▼林野高校生が企画した「むか

図1 「高等学校教科指導パワーアップ事業」

岡山県教育委員会が2009年度から実施した研究事業。当初、国語、数学、外国語を対象にしていたが、高校における総合的な学習の時間のさらなる充実が求められたことを受け、翌10年度から同教科を加えた。普通科の3校を推進校に指定し、教科指導コンサルタントと共に2年間の研究を継続。全体計画・実施計画書・年間指導計画、マニュアル、ルーブリックの作成ほか、探究的な学習を軸とした課題研究の進め方についても研究。関連して、11・12年には「高等学校(教科指導)パワーアップ推進フォーラム」を開催。各校の教員が自校の取り組みについてポスター発表を行い、見学者の質問に答えるなど、同教科で生徒が行う取り組みを疑似体験する試みを行った。



し倉敷ふれあい祭り」は好評で、今も地域の人から喜ばれています。体験や研究の成果を、論文やプレゼンテーションとして発表することもあれば、イベントのような形でアウトプットすることもあります。いずれにしろ、高い意識で取り組み試行錯誤をしてきた高校の蓄積が今につながっていると感じています。

——岡山県の高校では比較的うま

く総学が浸透していったのですか？

赤松▼もちろんすべての学校ではありません。特に普通科の進学校では、「余計なことをすると教科の時間が削られる」という否定的な意見もありました。初期のころはモデルもなく、進路のための情報収集や行事の準備に充てられることも普通でした。そうしたなか09年3月告示の学習指導要領改訂を機に県の取り組みを変えていこうという機運が高まりました。この年「高等学校教科指導パワーアップ事業」(図1)が始まったのですが、国語、数学、外国語に加え、翌年、あえて総学を研究対象に加えたほどです。

ものです。

赤松▼教育委員会では民間の方と話す機会がよくあったのですが、二様に「指示されたことをするだけの若者はいらない。どんな業務でも課題に気づき解決策を提案できる人材が欲しい」と言われました。そんななか改めて総学の理念に触れるにつれ、この流れに間違いがないことを確信していました。知識だけを懸命に吸収し、入試はクリアしたけれど社会では使えない物にならないでは教育の意味がありませんから。

総学における組織論 管理職の役割と意識改革

——学校経営に話題を変えたいと思います。まず、総学を推進する際の管理職の役割とは何でしょうか？

香山▼「逆向き設計」という考え方がありますが、どんな生徒を育てたいのか、誰もが納得できるゴールを設定し、どういうステップを踏めばたどり着けるかを考え、共有していくことが校長の大切な役割だと思います。具体的なことは、みんなで知恵を出し合っただけでいい。

赤松▼おっしゃる通り、管理職の仕事は、腑に落ちる形で方向性を示すこと。そしてみんながその気になったと

き、今度はミドルリーダーが仕掛け人となり先生方の手をつないでいくのが理想です。ただし、能力の高い人はすべてを抱えてしまうため全校的な組織を作って役割を分担することも重要です。

香山▼確かに、属人的にならず、組織的な取り組みにしなければ、持続的な発展は見込めません。

赤松▼一足飛びに高いレベルを目指すこともありません。「今年度はまず、ここをクリアしよう」という具合に段階的に積み上げていけばいい。そうしてまとめたものをマニュアルのような体裁で残していけば、異動があっても組織は動いていくものです。

——教員の意識は簡単に変わるものでしょうか？

香山▼生徒の喜ぶ顔を見れば変わりますよ。逆に言えば、目指す像を示しても、そこに生徒の笑顔が想像できないければ、頑張りようがありません。そのためにも、粗削りでもいいから発表などアウトプットの場面を設けるべきです。そうした場ではどんな生徒でも懸命に説明しようとするし、それに対して友人が反応したときは目を輝せるものです。そうした光景を見れば、ためらっていた教員も腰を上げるはずですよ。

図2 和気閑谷高校の「閑谷學」

住民との交流を通じて地域貢献のあり方を考える探究学習。これまで同校の総学では、閑谷学校(岡山藩による庶民のための学校)を題材に地域の歴史や文化を学ぶ学習や、希望進路に応じた調べ学習を展開してきたが、2014年度にリニューアル。探究的な学習や協同性の要素を付加し、より深く地域とかがわりながら課題を発見・解決する活動に発展させた。研究主任を中心とした同校教員、地域おこし協力隊などがプログラムを設計し、「鯉のぼりから学ぶ文化のあり方、広め方とは」「老い/ボケ/死から学ぶ介護」「特産ヒット商品開発」など、地元講師協力のもと10テーマ計23の講座を開設。1・2年生約300人が希望の講座を選択したうえで、自分たちにできる課題を設定。半年間かけて取り組んだ後、成果を校外に向けて発表した。今後の目玉になりそうなのが、生徒による商店街活性化。駅前の銀行跡地を公共スペースとし、恒常的に高校が地域活性にかかわれるような仕組みを検討中。今年度は講座数を厳選し、教員がより深くかかわる体制にする予定。

赤松▶成果物として何かを表現し、それに対して他者の反応があることは、生徒にとっても貴重な体験です。

香山▶総学は知識の量を計るわけではなく、それをどう活用しているかという行動の部分が評価の対象となります。ペーパーテストベースの成績が芳しくない生徒でも素直に喜べる評価が本来可能なのです。にもかかわらず、「やつて良かった」「頑張った」という簡単な評価で終わることがとても多い。総学が足踏みをしている原因のひとつはそこ。評価が甘いのです。そうではなく、この時間でしたことが力になったと生徒自身が手応えを感じら

れるようにしなければいけません。そのためにはルーブリック(評価基準表)の整備など、従来型の評価を乗り越えることが重要です。ルーブリックの何が良いかと言えば、指導者と学習者が評価基準を共有できること。主体的で公正なルールだということです。

赤松▶先ほど話したようにいきなり100点満点を目指す必要はありません。私が今勤務している倉敷天城高校では、ルーブリック集(図3)を作成し、公開していますが、これは本校の課題研究の取り組みを蓄積してきたもの。「明日までに作りましょう」と簡単にできるものではありません。それに、形だけ作ってもそれが機能するかどうかは別問題。うまく各校の現状に落とし込んでいくのも管理職の役割だと思います。

探究と協同を通じて、 答えのない身近な問いに挑む

——課題発見・解決的な活動が发展的に繰り返される「探究的な学習」を総学で行うとき、テーマはどのような設定すればいいでしょうか？

香山▶例えば「十字軍はなぜ遠征したか」という問いは、一般的には世界史の範疇ですが、統計処理を数学でするとか、影響を科学的に分析する

倉敷天城高校 教頭
赤松一樹先生



とか、外国の文献を読むなど、さまざまな教科で深めていくことができず。いわゆる「合教科型」の学習で、これは教科学習でも工夫次第で可能です。一方、私がイメージする総合型の学習とは、解のない問い、あるいは、どの教科の知識を活用すればいいのかわかりにくい問いに対して、これまで身につけてきた知識を紐づけていくというものです。

赤松▶研究に付随してアンケートを取ろうと思えば、正しい設問を作るだけの国語力がいりますし、統計的な知識も必要です。教科で学んだことを活用し、足りない点に気づくことで教科学習の動機づけになるところも、総学の良いところでしょう。

香山▶テーマ設定については、リアルさがポイントだと思っています。自分が生きていく上で疑問に感じることを問い立ててみる。私の現在の勤務校で

行っている「閑谷學」(図2)という探究学習も地域に密着したものです。ついでに言うと、地域の課題とは何も地方特有の題材ではありません。都市にいても外国にいても、自分が住んでいる場所で課題を発見できないようでは先に進まないくらい肝心のテーマだと思っています。

赤松▶よく、iPS細胞やハイブリッド車など、流行のテーマを掲げる生徒がいますが、インターネットで調べた知識をまとめて終わりというケースが目につきます。もともと、自分の手が届く身近な題材があるはず。その中で、うまく最先端の研究にかかわることを見つけ出してもいいし、林野高校や和気閑谷高校のように地域に出かけて行くのもいいと思います。

——「探究」と並ぶ総学のキーワード「協同」についてはどうでしょうか？

香山▶一度探究心に火がつけば、むく



和気閑谷高校 校長
香山真一先生

むくと膨らんでいくもの。しかし、二人での探究活動には限界がありますし、アウトプットする場面で他者との協同が必要になってきます。探究と協同は切っても切り離せません。

赤松▼みんなで一緒に何かをする。これが協同なのではありません。一人でやっているように見えても一人で行っていることなどありえない。個人研究であつても他者からの疑問に対して「あなるほど」と気づくことが大事です。その点、周囲とのかかわり合いをどう教員が作っていくかが鍵。例えば、クラスメイトの発表に対して「的を射なくともいいから何回か必ず質問するように」と促すと、最初は見当はずれの質問ばかりなのに、しだいに本質を突く質問が飛び出すことがあります。発表する側も、それに必死で答えな

ければいけないため、学びの集団として大きく変貌していくのです。

——教員の役割は、学びの場をうまく作ることでいいですか？

赤松▼生徒に任せきりにするのではなく、もちろん指導も必要です。ただしそれは、上から引き上げるのではなくありません。生徒が足踏みしているときに、「こういう見方をすればどうなる?」「こういうところに取材に行けば糸口が見つかるのでは?」など適切にアドバイスすること。教員が答えを提示する必要も、そもそも答えを知っている必要もありません。

香山▼教員は、正答とそこへ導くプロセスを知ったうえで、高みに引き上げるのは得意なのに対して、解のない課題解決型学習はある種の恐怖を感じるもの。「知らない」では権威の喪失になるため不安なのでしょう。

赤松▼本当は、教員の業務も同じなのですけれどね。例えば、受験生を増やすために中学校へのPRを工夫する必要がありますが、その際、「どうしよう。今までどおりではだめだし」と懸命に考えるではないですか。正解がないなかで、自分たちなりに試行錯誤する。総学も同じだと思います。

——最後に、今後の総学のあるべき姿と期待をお願いします。

図3 倉敷天城高校のルーブリック

多くの先行事例や指導に基づき同校で作成してきた評価基準を整理し、『真正の評価のための汎用的ルーブリック集』として公開。SSHの課題研究で使ったものが中心だが総学での活用へのヒントにも。

評価プロセスに関するルーブリック	
評価	ルーブリック
十分 (4)	どのような事象に異議を持ったかが明確に述べられており、課題設定に当たり、これらの事象と課題との間の因果関係や関連性が明確に示されている。
おおむね十分 (3)	どのような事象に異議を持ったかが明確に述べられており、課題設定に当たり、これらの因果関係や関連性が示されている。
やや不十分 (2)	どのような事象に異議を持ったかが述べられているが、課題設定に当たり、これらの因果関係や関連性が曖昧であったり、解決すべきでない高いレベルの課題が設定されている。
不十分 (1)	どのような事象に異議を持ったかが述べられていないが、課題設定に当たり、これらの因果関係や関連性が示されていない。

香山▼今、議論が進んでいる大学入試改革では、これまで適正に評価する尺度を持ちにくかった思考力・判断力・表現力まで踏み込もうとしています。これらは総学で鍛えられる力です。そのため、「総学はやりました。でも学力は別の方法でつけます」という発想は通じなくなるとも思います。ただし、総学は各学年で週1時間程しかないため過度に期待しすぎてもいけません。その点、教科の中にどれだけ思考力・判断力・表現力を養うプロセスを盛り込むかも今後課題になるでしょう。

赤松▼学校教育全体で育む必要があるとはいえ、総学はその核に成り得る時間。探究的・協同的な学習を通して学びの楽しさに触れた生徒は、限られた時間では足りず、放課後や休日を活用するようになるものです。そうした生徒が社会に出て、新しい物を創造し、周囲を引き込んでいくようになりたいことを期待します。

香山▼これからの社会で必要とされるのは変化に対応する力であり、失敗を恐れず突破していく力です。そうした力をつけるためには、解のない問いに取り組み経験が大切。今の教育課程でそれができるのが総学です。まだ、しっかり活用していないのなら、待ったなしで取り組むべきだと思います。